

# iPadを使っでの支援学級での指導事例

～「できた!」を支える「できそうだ」を目指して～



松江市立 意東小学校  
井上 賞子

# 学びやすさを支える手だてとして活用したIさんについて

① 「読める」を支える手段として  
→ 「FirstWordJapanese」 「これなあに」  
「ひらがな50音」

② 「書ける」を支える手段として  
→ 「こどもレター」  
「にほんご ひらがな」

③ 「伝わる」を支える手段として  
→ 「DropTalkHD」 ・ 「PhotoMemes」



# Iさんのこと

- 知的障害特別支援学級在籍
- ダウン症
- 週2時間の国語の個別指導を自閉症・情緒障害特別支援学級担任であった井上が担当
- 他の場面での学習についても、担任と井上で相談しながらすすめていた。



# Iさんのこと

- 単音で読めるものではなく、名前も弁別できていなかった。
- 3語文で話すことがたまにあるが、ほとんどは単語。復唱も語尾のみになりがちだった。
- 自分から発信することは少なく、不明瞭なため聞き返すと黙り込んだり顔をふせたりしがちだった。
- すねて活動に取り組めなかったり、何を聞いても首をふって拒否したりということもあった。
- 間違うことを極端に嫌がり、「まちがってもいいからやってみよう」ということは難しかった。

# Iさんのこと

- 理解している言葉は多いように思われた。
- 器用で、丁寧にシールをはったり丁寧に塗りつぶしたりはできた。
- 友達との関係は良好で、周囲がすぐに手をかしてくれていた。

※友達と自分を比べて、たくさんの「できない」を感じてきていたのかもしれない。

「できそうだ」の見通しの中で学ぶことで  
「できた!」と自信をひろげていきたい

# 「読めない」Iさんの「読める」を支える



薄く示されるお手本に文字のチップを重ねると、音声化してくれる。



写真を見て、その名前を二択から選ぶ。わからないときは「れんしゅう」ボタンを押して一覧から写真を選ぶと、正解がテキストと音声で示される。



ひらがなの単音を聞いて、下に示された3択から選んでで答える。

# 「読めない」Iさんの「読める」を支える

- 「音の支援」と「マッチングで確認できる」ということから、間違えることをとても嫌う本児も納得して取り組めた。
- 決めた数だけ最後までやり終えて「できた!!」と自慢げに伝えてくるようになった。
- 音を常に確認しながらマッチングできた事で、文字の読みへの意識がたまった。
- 次第に音のヒントが出る前に「しお」と言ったり「め」と言ったり、絵や文字を見て読みをこたえるようになって行った。

- マッチングが得意。
- 持続して取り組める。

※この姿を活用して、学習を組んでいけな  
いか？

アイスのへらで  
マッチング







## 「読めない」Iさんの「読める」を支える

- 当初から「ぬ・め」「は・ほ」「る・ろ」などの似た形も正確に区別できており、音との一致が進んでいくと、必要な文字を一覧から探し出すことも上手になっていった。
- 1年の終わりには、「おむらいす」のような5文字までの清音の単語であれば拾い読みして言われたカードを正確に選ぶことができるようになった。

「もっと読みたい」

## 「読めない」Iさんの「読める」を支える

- 文章になると、1音ずつは読めるが「何が書いてあったか」短い文章でも、はなかなか把握できない様子だった。
- 2年生以降の「読み」は、「書き」の学習の中でさらに伸びていった。
- (この点については、次項で触れたい)

# 「書けない」Iさんの「書ける」を支える



お手本を入力すると、なぞり書きで  
お手紙が書ける。そこにイラストを  
つけたりして印刷する際は、お手本  
が消えて自分の書いた文字だけにな  
る。

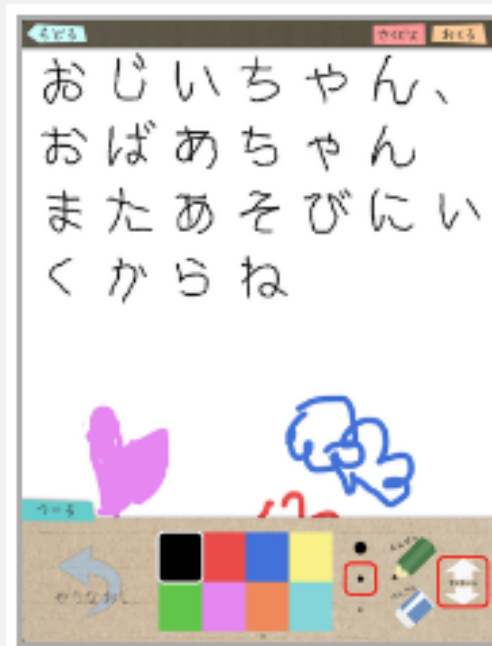
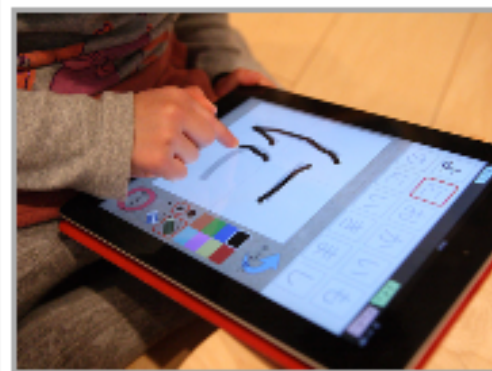


リズムカルに再生される単語を聞い  
て、選択肢の中からひらがなを1つ  
図  
津順番に選んで答える。



なぞり書きが得意なことを  
活用して、お手紙の作成

iPad スクリーンショット

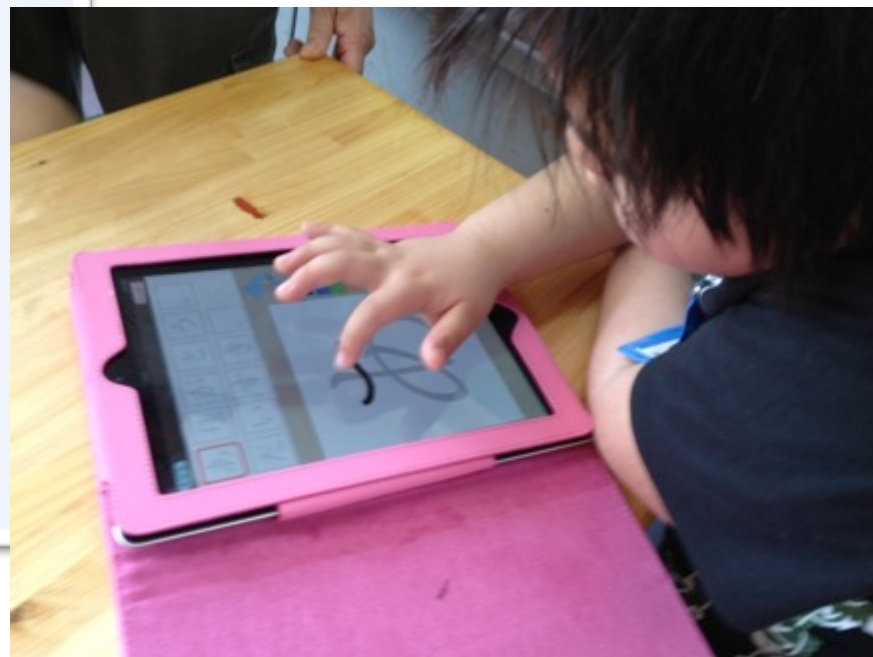


おかあさん、あ  
りがとう。  
だいすき。

なぞったお手本が  
「明朝体」とわかる  
ほど丁寧に書くこと  
ができた



母の日のお手紙



# 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

- 「こどもレター」では、大きな表示をなぞっていただけでお手紙が出来上がることから、まだ文字が書けない時期の本児も楽しんでお手紙を作ることができた。
- 母の日の手紙を、内容を相談して丁寧に書いて送ったところとても喜ばれ、「もっと書きたい」という意欲を強く持った様子だった。
- 当時はまだ鉛筆を持って線を書くことには慣れていなかったが、指先で大きくなぞってけるので、自信を持って取り組む様子が見られた。

「もっと書きたい」



- 細かい作業に丁寧に取り組める。

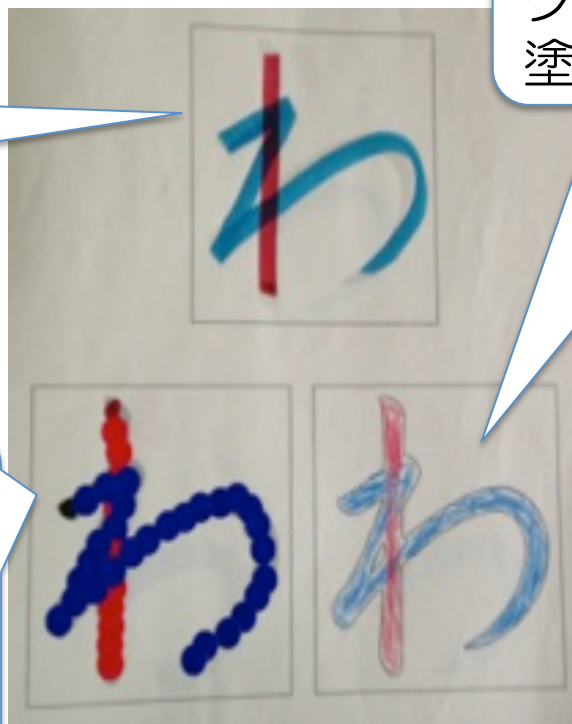
※この姿を活用して、学習を組んでいけな  
いか？

お手本を色  
分けして提  
示

白く中をぬいた文字を、  
クーピーで色分けして  
塗っていく

お手本を見な  
がらシールを  
はっていく。  
触って線の動  
きを確認する。

捉え直しをしてか  
らなぞり書き





## 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

- 1年の終わりにには、50音は1文字ずつであればすべて書くことができるようになっていた。
- 「明日の予定」を予定ボードを見ながら自分で書いたり、支援員さんに書きたいことを伝えておいて1文字ずつ言ってもらうと、50音表を見ながらその音の文字を自分で探して書くことができるようになっていた。

「もっと書きたい」

# 2年の始めの「読み」の状況

- 拾い読みはできるが、なかなか言葉としてつないで読むことが難しい

- 何度も練習すると、短い文章なら読めるようになったが、内容を聞くと答えられないことも多かった。

ex.) 「いちごとバナナ、あかいのはどっち?」  
練習して読めたので答えを聞くと、首をかしげた。(「いちご」「バナナ」「赤い」「どっち」の意味は理解している)

# 2年の始めの「書き」の状況

- ・視写が得意で、集中して丁寧に書き上げることができるようになった。

- ・日常的な単語でも、1人で書くことは難しかった。いったん声にだして確認することができても、「じゃあ書いてみよう」というと書けない状態が続いていた。

Ex.)絵カードを見て「みかん」とわかって応えることができ、「み」「か」「ん」と1文字ずつ言ってもらえると書けるが、「みかん」と言われると書けない。

## 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

- 「にほんご ひらがな」では、単語を聞いて単音に分解して選択していく課題に取り組んだ。
- 全ての単音は読める状態であったが、語頭音の次に語尾音を選ぶことが多く、単語を音に分解できていない状況がうかがわれた。

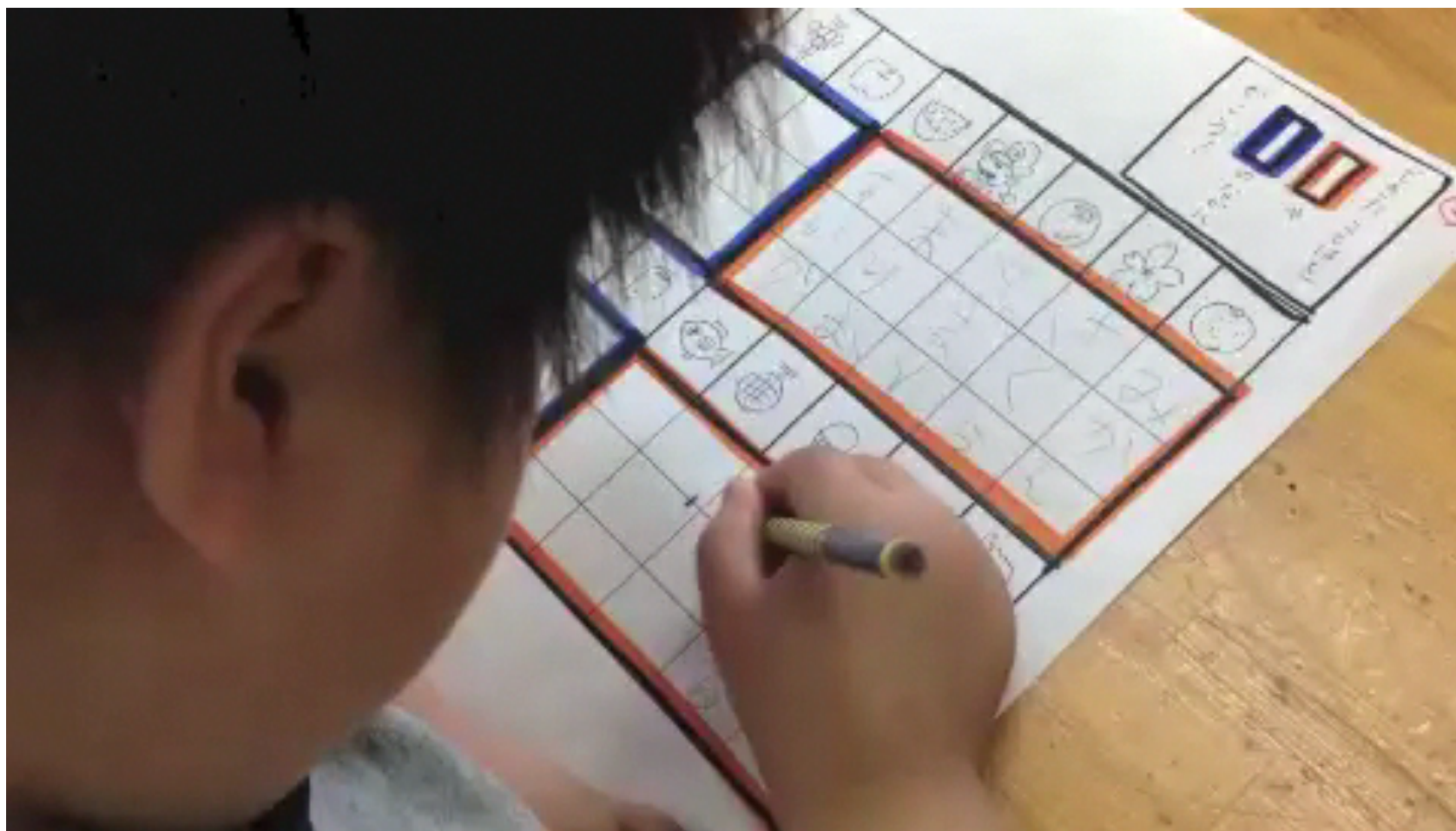


# 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

- 「音にわけられていない」という状況を踏まえて知っている単語を単音に分けて確認し、文字を選択していく課題に取り組んだ。



「書けない」Iさんの「書ける」を支える



## 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

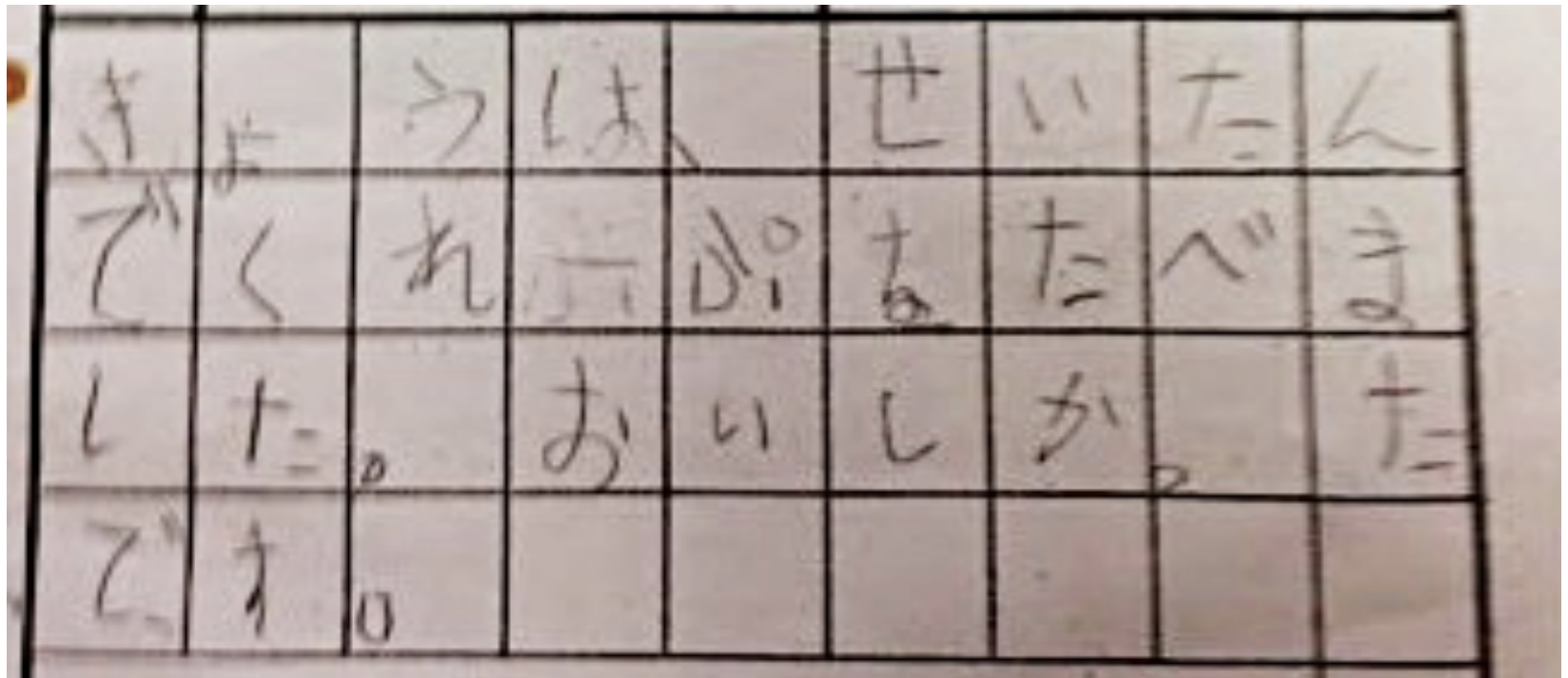
- 3文字→4文字→5文字と単語の文字数を増やしていき、想起した単語を自分に音に分解して書くという学習を重ねていった。また「にほんご ひらがな」の単音への分解の課題にも継続して取り組んだ。
- 文章を書く際も、それまでの1文字ずつを確認させていくような声かけや支援から、語の塊を聞かせて自分で音に割って書いていくことを意識づけていった。

## 「書けない」Iさんの「書ける」を支える

- 2年生末で、日常的な振り返りの文章は、1人で書くことができるようになった。
- 「を」「は」「へ」「っ」なども、よく使う表現の中では、適切に使うことができる。
- 長音・拗音・拗長音については、学習中。



- 「くれーぷ」を「くれ  
ぷ」と書いて指導を受け  
た以外は、自分で内容を  
考えて文字を想起して1人  
で書いた↓



## 「書ける」が「読める」へつながる

☆言葉の塊を文字に分解できるようになっていったことで、文字を言葉の塊に合成していくこともできるようになっていき、「読み」の方もスムーズになってきている。

☆言葉の塊を鉛筆で囲んでおくと、そこはバラバラにせず読もうとする姿が見られるようになった。

# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える



膨大なシンボルが既に用意されているVOCAアプリ。必要に応じて提示の数や画像や音声を変えても使え、汎用性が高い。



写真やテキストを簡単に記録していけるカレンダーアプリ。  
複数のカレンダーを作ることも可能。

# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 「DropTolkHD」では、朝の会の司会を行った。
- それまでは支援員さんに項目を言ってもらい、それを復唱する形でやっていたが、語尾だけをなぞったり、何も言わないことも多かった。
- 友達を当てる場面でも、名前を知っているのにスムーズに出てこないため、支援員さんに「〇〇さん」と言ってもらってから少し声を出すくらいだった。

# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 選択して読み上げさせ、それを聞いて復唱する方法で取り組んだ。
- 操作はすぐに覚えた。次の項目に移る前に前の項目を消すことも、スムーズだった。
- 最初は「全部聞いてから」話そうとしていたが、次第に「読み上げにかぶせるように」話すようになっていった。



# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 友達を当てる場面では、当初はボードから選択して読み上げさせて復唱していたが、次第にあてたい相手の顔を見て「〇〇さんお願いします」と言えるようになり、**ボードの読み上げは使わなくなった。**
- 1人で司会の仕事をこなせるようになって、自信をもって取り組む姿が見られた。本児が司会の当番になっている、木曜日を楽しみにするようになっていった。



# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- ・なかなか出なかった語尾の「です」や言葉をつなぐ助詞についても、選択・読み上げ・復唱を繰り返す中で意識することができるようになって来ている。





# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 「PhotoMemes」では、「〇さん学校」「〇さんおうち」の2つのフォトカレンダーを作り、それぞれに学校や家庭での姿を写真で記録して行った。





# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 以前は思いはあってもうまく伝えられないため、家庭で「学校であったこと」を聞いた際も、学校で「家庭であったこと」を聞いた際も、首を傾げたり視線をそらしたりしてあまり反応しなかった。
- 写真を共有し、正しく「伝わる」という見通しが持てたことで、自分から写真を開いてみせようとしたたり、写真を指差しながら話そうとすることが増えて来た。

「もっと話したい」

# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

- 朝の会の「スピーチ」の時は、アプリを起動して紹介したい写真を選んで開き、友達に見せながら話したり、質問に答えたりするようになった。



「もっと話したい」

# 「話せない」Iさんの「話せる」を支える

ex.) 「なっとうごはんを食べたよ」と伝えている場面

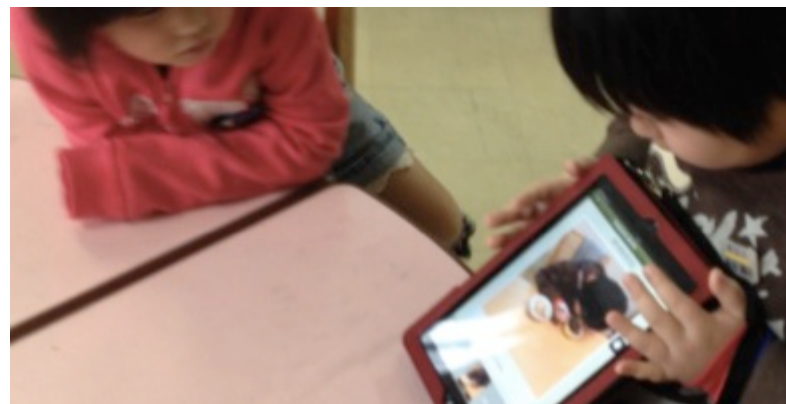
「なっとうごはんをたべたよ。質問はありませんか」

「誰と食べましたか」

(指を3本立てて)「3人」

「3人ってだれ?」

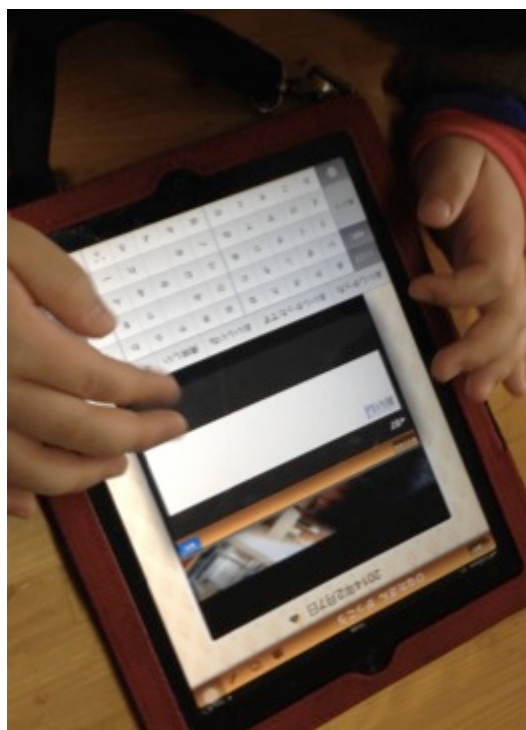
「ぼくとOちゃん(弟)と  
ママと3人」



- 他の質問にもにこにここと答えていった

# 「話せる」「読める」が 「書ける」へつながる

最初の頃は、写真だけだったり、写真へのメモは大人が書き入れたりしていたが、50音キーボードを使いながら自分で入力するようになっていった。



「話せる」「読める」が  
「書ける」へつながる

促音や句読点まで、入力が早くて正確なので、家庭でも学校でも「すごいねー」とほめられることが多く、意欲的に取り組んで「はい」と胸をはって見せてくれるようになっている。

「聞いてほしいことがあるよ」

「もっと書きたい」  
「もっと話したい」



# ICTが支えてくれたもの

☆可能な手だてで「できそう」が支えられたことで意欲が継続し、「できた!」につながったのではないか

- 「50音を覚えてから」ではなく  
→ 「読むって楽しい♪」から
- 「50音を覚えてから」ではなく  
→ 「書くって楽しい♪」から
- 「話し言葉を増やしてから」ではなく  
→ 「伝えたいことが伝わる♪」から

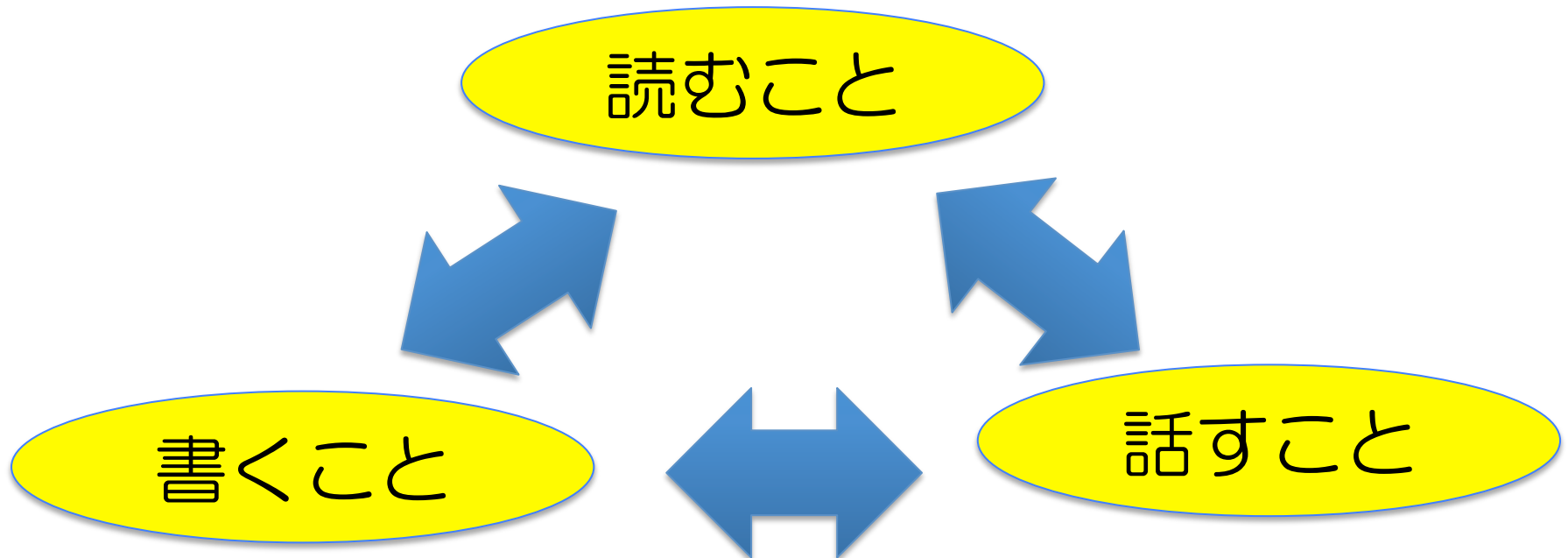
# ICTが支えてくれたもの

☆「伝わる」→「伝えたい」→「伝わる」の繰り返しの中で、日常の発語が増えて行ったのではないか

- 「うん、わかった」と返して来たり、
- 「できたよ」「〇〇くんどこ?」「これやるの?」と自分から問いかけて来たり
- 家庭でも「やり取りの言葉が増えて来た」と実感
- 祖父母も「電話でのお話が上手になった」と評価
- 不適切な発言が、ほぼ聞かれなくなった

# ICTが支えてくれたもの

☆多様な「伝える」手だてを持てたことが、相互にかかわりあいながら定着につながったのではないか





# ICTが支えてくれたもの

Aができた

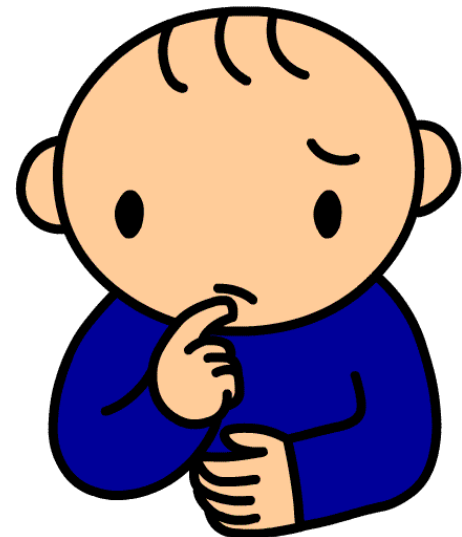


Bに進もう

Aに困難がある子は、  
いつまでたってもB  
に進めない

「いつまでたってもできない自分」

- 意欲の減退
- 自己評価の低下



# ICTが支えてくれたもの

Aが困難



ICTでAを補いBへ

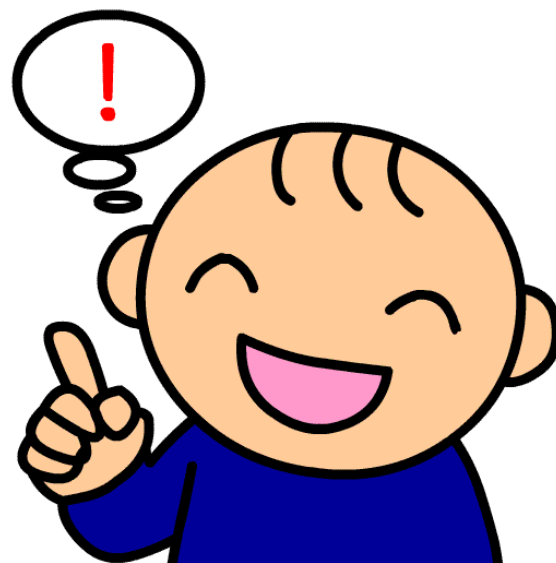


学習機会が増える中で  
Aも向上

「読めない」「書けない」「話せない」Iさんが  
「読むこと」「書くこと」「話すこと」をたのしめる!

「できる自分」

- 意欲の継続
- 機会の保障



# 今後に向けて

- 「自分で撮影する」を支えていく  
→撮ってもらったものから選ぶのではなく、自分で撮りたいものを撮ることで、より「伝えたい」へ
- 「入力」を表現の手だての1つとしていく  
→「書く」に「入力する」が加わることで、日常敵に活用できる方法を増やしていく

